

# 全国義士会連合会々報

発行人 〒104-0052 東京都中央区月島3-15-9 中島康夫 TEL 03-3534-0666 編集者 中島康夫 TEL 090-8005-9762

## 第38回 京都 山科義士まつり

### 平成24年 12月14日(金) 《小雨決行》

#### 写真コンクール開催

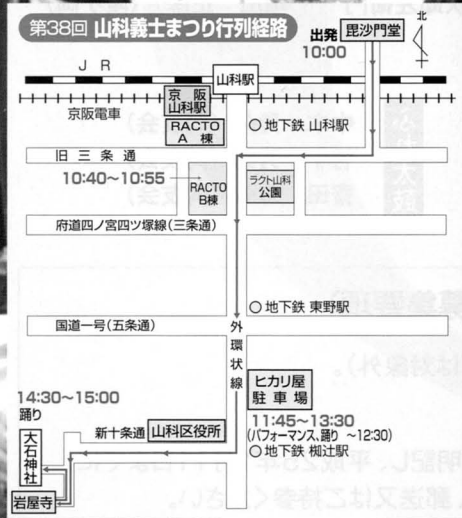
たくさんのお応募をお待ちしています。  
(裏面の募集要項をご覧ください。)

#### ●お問い合わせ

山科区役所地域力推進室まちづくり推進担当

☎075(592)3088

●山科義士まつりHP <http://gishimatsuri.com/>



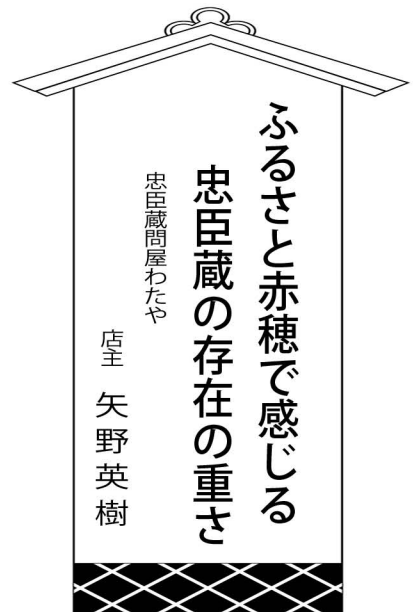
《山科こども歌舞伎》  
「仮名手本忠臣蔵」  
公演日 十二月九日(日) 午後二時

口上  
三段目 足利館松の間 刃傷の場  
道行旅路の花聲  
十一段目 高家 討入りの場

場所 大石神社 社殿(入場有料)  
主催 山科こども歌舞伎実行委員会

**主催** ●山科義士まつり実行委員会  
●山科区自治体連合会  
●山科区地域女性連合会  
(社)山科経済同友会  
おこしやす「やましな」協議会  
●京都都市新観光協会

**協力** ●東K京山山山  
●阪科科科  
●太電  
●秦S気警消区  
●映京鉄察防役  
●画道(株)署署所  
●村都署署所



最近赤穂では、いや、赤穂だけではないかもしれないかもしれませんが、挨拶代わりのようになってしまっている。「最近の若い世代は忠臣蔵を知らないから」という言葉。本当に悲しいかぎりです。赤穂において私達世代は、小学校の時には、義士祭当日に二時間だけ授業があり、全校生徒が講堂に集められ、校長先生に義士の話を教えて頂くということがありました。その二時間のお話を聞いたのち、市内中心部をパレードする討入り装束を着た四十七士を見て、わくわくする気持ちになったものです。しかしそのうち、世の中が週休二日制を導入し、半ドンと言われていた土曜日が学校も会社も休みになっていくうちに、いつの時点か正確にはわかりませんが、義士祭当日は赤穂では多くの会社とすべての学校が休みというようになっています。そうなるともちろん、二時間あった義士祭当日の「義士教育」は自然となくなり、逆に、義士祭の日は休みだから、どこかへ遊びに行こうというような風潮がごく当たり前のようになり、広がっていきました。それにより市内の子供たちは、どんどん忠臣蔵に触れる機会が少なくなり、物議を醸した「四十六士騒動」などもあり、当時私が

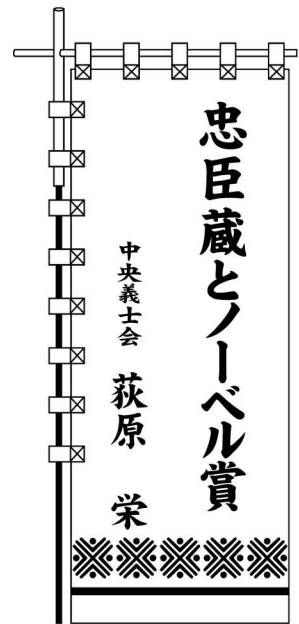
感じていたのは、「これが本当に赤穂なのか？」ということでした。日本国内においても、昔みたいに年末が近づけば、テレビや映画で忠臣蔵を流しているといった状況や、景気が悪くなると忠臣蔵だというようなことも薄れて行き、挙句の果てには、忠臣蔵はテロであるといったような、ごく表面の一場面だけをとらえたようなことが、まことしやかに囁かれるなど、私達の幼いころでは考え付かない状況となっております。

忠臣蔵の中には、今の日本の状況を考えてとき、何よりも大切にしないと心げない心がたくさんちりばめられています。昔から先人たちが大切にしていた「義」「恩」「恕」という考え方がそこかしこに見ることができ、日本人であることを誇りに思えることが出来ます。しかしながら、最初に申し上げたように「最近の若い世代は忠臣蔵を知らないから」という現実があり、そのことを突き詰めていくと、今の若い世代の中には、「義」「恩」「恕」という大切なものが足りないのではないかということが見えてきます。

将来の日本を考えると、果たしてそれでいいのでしょうか？

現在の赤穂は、赤穂小学校では四十七士のおぼえ歌が先生によって作られ、生徒たちが覚えるために一生懸命歌っています。城西小学校では六年生が卒業記念に忠臣蔵を演じ、それぞれの役を勉強しています。市内各小学校が、義士祭当日だけではない「義士教育」を行ってくれています。また、史実としての元禄赤穂事件を学び、赤穂忠臣蔵検定の教科書にもなっている「赤穂義士を考える」というわかりやすい本まであります。数年前のことを振り返って思うと、やっと故郷のヒーロー達のことを勉強してく

れるようになったとの安心感と、子供たちが大きくなって、故郷赤穂を誇りに思えるように勉強させてあげたいという願望が同時に沸き起こってきます。そしてこの度、十二月の赤穂義士祭をさらに発展させようと、「忠臣蔵ウィーク」と銘打ち、さまざまな企画を盛り込み、市民の皆様、赤穂を訪れて頂く観光客の皆様に、赤穂のまち、忠臣蔵のふるさとを楽しんでいただけるようにと、市民有志を中心に、行政、観光業界、地域経済を担っておられる各会社、商店の皆様、そしてなにより赤穂市民の皆様に、ご協力をお願いして無事開催することが出来ました。それは、やはり赤穂の皆様にとつて忠臣蔵はかけがえないものであり、ずっと大切にしていかなければならないことを証明してくれていると思つていきます。そして、故郷のヒーローにあこがれ、その中で自然に「義」「恩」「恕」などを学んだ子供たちが大きくなっていけば、赤穂のまちはどんどん素晴らしいまちになっていくと思えます。そう考えると、やはり日本全国でこの忠臣蔵を学び、日本人が本来大切にしてきた心を見直すことは、今の日本の中で最も重要にしなければならぬ心の勉強に自然とつながって行くものであると確信します。テレビ番組や映画を作っている人は、忠臣蔵を知らない世代なのではないでしょうか？そんな人たちがばかりではないと思います。もともとと赤穂から忠臣蔵の中にある大切な心を発信し、日本中で愛され続けてきた根拠の部分を伝え、これからの日本を背負って行く世代にしっかりと託せるような活動を続けていかなければなりません。日本中にいらっしやる忠臣蔵ファン、赤穂義士ファンを増やし続けるように、これから益々精進しなければならぬと感じた今年一年の活動でございました。



今年の十月に京都大学の山中教授がノーベル賞を受賞した。昨年の東日本大震災以来、領土問題やおそまつな政治動向など暗い話題が続く中で、久しぶりに明るいニュースである。

受賞理由は、iPS細胞を世界で初めて作り出したことによる。この研究は再生医療の分野や難病の方々に救うことが可能な画期的なもので、例えば心臓の病気で困っている人には、自分の皮膚の細胞から、心臓を作って移植できるなど、将来大いに期待される研究である。

ところが、これを自分の手柄にしようとすると、とんでもない人物が現れた。既にiPS細胞移植によって何名かの人々を救ったというのである。早速、マスコミが飛びついた。その報道は過熱し、連日流されたが、挙げ句の果てにそれがでっちあげだと分かり、マスコミは訂正文を出すやらお詫びをするやら大恥をかいたのである。

ひるがえって忠臣蔵についてはどうなのか。最近出版されている本や、テレビでの忠臣蔵番組についても同じ構造を感じるのである。

吉良上野介名君説や浅野内匠頭統合失調症説、バカ殿様の仇を盲目的に討った大石内蔵助は大バカ者、四十七士は就職活動のために討入った、忠臣蔵

の真実と銘打っていないながら小説をネタにしているテレビ番組、討入りはテロだなどといっている司会者などなど。全く真摯に史実の忠臣蔵（歴史学上は元禄赤穂事件）を研究している人間から見ると、でっちあげとしかいいようのない内容なのである。

両者とも問題は、事実をしつかりと確認もせず、視聴率と販売数をのぼすことだけしか考えていない結果である。さらに、単なる思い付きと、三百年前の元禄時代の事件を現在の常識で見ても、いい加減にやっているだけなのである。

地元の研究家が黄金堤などの治水工事は吉良上野介がやったのではない、と古文書を見つけて出して証明しているにも関わらず、相変わらず吉良上野介の成果にしている方々。浅野内匠頭には多くの従弟や親類縁者がいるが、その中のたった一人、内藤忠勝が増上寺で刃傷事件を起こしただけで、松之廊下事件をDNAのせいにしてしまう漫画家。明らかに吉良上野介からいじめをうけていた証拠があるのに、それを認めようとしない人々。現代の社会通念や常識で忠臣蔵を判断し、説はいくつもあっても良い、と想像で作りに出したものを肯定する人。また、「歴史は史料によって構成される」とは歴史を研究する上での常識であるが、それを否定し、史料主義を批判した歴史書と銘打ったトンチンカンな本を出す人。いったいこの人は、どうやって大石内蔵助や吉良上野介が存在していたことを知ったのだろうか、と首をかきげざるを得ないようなことが山ほどある。

忠臣蔵の研究も、山中教授の研究と同じく日進月歩なのである。三十年前の本に書いてあるからといって、それが正しいとは限らない。

現在でも新しい史料が発掘され、新しい知見が現

れるのである。黄金堤が吉良領内にはなかったとか、吉良上野介は大変横柄な人柄であること、また、性格が悪いことなどは、当時の史料に明確に記載されていて、ここ数十年の発見なのである。このことを知るだけでも、これまでの忠臣蔵の見方が変わるはずである。

これらは事実認識の誤謬なのだが、不幸にして、昭和十年代に忠臣蔵が戦争と結びつけられ、今でもそのにがい思いを持ち続けている方々もいる。特に、反権力を旗印にした革新的文化人なるものが存在し、忠臣蔵を今も国家主義や国粹主義と結びつけ、「忠君愛国」思想である、と断じている。一人二人の人数であれば、どうぞご自由に、で済むのだが、大新聞社やマスコミの一部が思想的に同じことを主張し続けているため、どうぞご自由に、では済まないののである。

これらの方々やマスコミは、単なる事実認識の誤謬に留まらず、間違った史実を平然と流し続け、歪曲した忠臣蔵像を社会に垂れ流しているのである。

忠臣蔵は歴史的事実であり、その衝撃の大きさから文化にも大きな影響を与えている。江戸時代には、忠臣蔵は文化の最前線にあつて、人々の生活や心を豊かにしていたのである。現在もそのことは全く同じなのだ。

ただ、江戸時代と違うのは、今は史料を批判的に見て、史実かどうかを見極めながら、正確な歴史を組み立てられることである。

（ここで示している「忠臣蔵」は元禄赤穂事件、歌舞伎や映画、小説などを代表した名詞として使用した）

# 堀内伝右衛門二百八十六回忌墓前祭と 赤穂義士ゆかりの手水鉢見学が行われました

編集部

中央義士会理事宮川政士氏が代表となっている、熊本県山鹿市の平成堀内組が、山鹿市の日輪寺で、堀内伝右衛門の墓前祭を行いました。これに合わせて、宮川代表以下五名の方々が、熊本市花園小学校にある、赤穂義士が使った手水鉢を見学しました。

赤穂義士の討入り後、大石内蔵助以下十七名は、熊本細川家にお預かりとなりました。その細川家下屋敷において、堀内伝右衛門は接待役を仰せつかり、赤穂義士とは大変親しくなった方です。伝右衛門が、お預かり中の出来事などを書き残した「堀内伝右衛門覚書」は、元禄赤穂事件を研究するために大変重要な史料となっています。

伝右衛門は、赤穂義士が切腹した後も、義士の遺族を訪ね、また、日輪寺に義士の遺髪塔を建立するなど、生涯義士たちにつくしました。伝右衛門は熊本に戻った後、自分の領地のある山鹿に住み、享保十二年八月二十六日に亡くなり、日輪寺に弔われました。

その伝右衛門を顕彰する「平成堀内組」は、



日輪寺での墓前祭

年墓前祭を開催していますが、今年は伝右衛門の二百八十六回忌にあたり、八月二十四日に日輪寺において、多くの関係者を集め墓前祭が行なわれました。

手水鉢は、赤穂義士が白金の細川家下屋敷



手水鉢の前にて

に預けられていた時使用していたものです。赤穂義士の切腹後は、家臣の手によって保存され、大正五年に花園小学校に寄贈されました。

手水鉢は石製で、縦六十五センチ、横六十五センチ、高さ四十七センチの大きさです。現在は、花園小学校の校庭の横に説明文と共に置かれています。

宮川代表らが同小学校を訪れ、手水鉢などを見学した後、梶尾典子校長に、儒学者山鹿素行の教えをまとめた冊子を手渡しました。





平成二十四年十月の初め頃か、一本の電話が入り、日光市の方より「大石内蔵助の襖字」があるが、鑑定していただきたい旨、申し込まれた。この時点では、これまでに多くの鑑定をしてきた通り、正誤の判定をすれば良いと簡単に思っていた。

最初の電話でのことであるが、その中で知ったことは、

- ①大石内蔵助の襖に書いた漢詩が十二枚。
- ②大久保長安の掛け軸
- ③田布施流火繩銃秘伝書十六巻
- ④水戸徳川家老雑賀密田の書
- ⑤小笠原流秘伝書
- ⑥その他、古伊万里、漆絵、谷文晁、亀田鵬斎の書など、四〇〇点

の品々が発見され、その中に「大石内蔵助の書」が含まれていたというのである。「良雄」の落款も、間違いはないようだと言張してきた。しかし、現在まで「良雄」という文字の落款も篆刻もお目に掛かったことはなく、それだけでも疑わしく思われた。

更に、襖文字とあるからには、人の大ききぐらいの高さである。それが、十二枚もあるというのである。

そこで先ずは、その物件（漢詩）のコピーを送ってもらうことにした。

一週間位した十月十三日、そのA4ほどの写真が十二枚手元に届いた。一目見るなり漢詩であることと、字が上手すぎて内蔵助の字ではないことに、直感した。

そこで更に念のため、赤穂市市史編纂室の小野真一課長の意見を伺うべき、鑑定史料のコピーをFAXで送信

してみたところ、この内蔵助良雄の漢詩とされている書が、昭和時代の仏教ジャーナリスト常光浩然氏（一八九一〜一九七三）の達筆ではないかということになった。常光氏は広島（寺名は不明）の嫡男として生まれ、明治四十四年三月第四仏教中学を卒業、大正三年三月東洋大学専門部を卒業していたことが分かってきた。

東洋大学へ連絡したところ、大変好意的に対応してくれて、常光浩然氏という方は、浩然（こうぜん）は法名で、本名は「徳磨」であることが分かった。

従って、この鑑定依頼の書は、実在した僧「常光浩然」という方の書であることが、やや確実であり、偽書ではないが、大石内蔵助良雄の書ではないことがはっきりしてきた。

では、「浩然の印」の下に押されている「良雄」の印は何か。

矢張り、元々の襖書を切り落としたと、いうことであるので恐らくは、後になって「良雄之印」を押したのではないかと推測した。それにしても、今まで多くの鑑定をしてきたが、多くは、善書、悪書の判定で終わるのであるが、書が偽造屋さんの書筆でないことは感じていた。

その後、我が会評議員の成清寛徹氏よりの教示で、この度の漢詩が李白の七言絶句「峨眉山月」（がびさんげつ）唐詩であることを知る様で、全くの薄学を恥じ入るばかりである。

更に、同評議員で義士の子孫である勝田芳造氏からも連絡がきた

勝田氏の教示によれば、唐の時代に孟浩然（もうこうねん）という詩人がいたことと、この孟浩然と同じ唐の詩人李白と交流があったことを知る。

ということとは、大正期の僧常光浩然という方がおり、孟浩然を崇拝して浩然（こうねん）を（こうぜん）と読ませて自分の法名にした。

その「浩然之印」が今度の落款ではないかと判断せざるを得なかった。

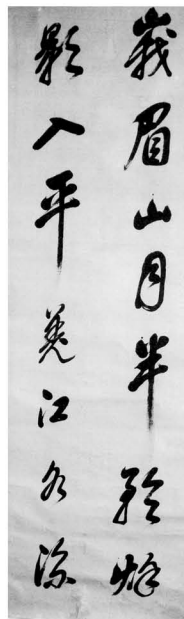
一時は、常光浩然の本名が「良雄」ではないかとも考えたが、父親がやはり僧であったため、本名も「徳磨」と

いうことが判明した。

しかし、本名が「徳磨」では、依然スッキリはしなかったところ、依頼主からの連絡で、一七七八年、つまり、安永七年生まれ、將軍家治の時代（義士切腹七十五年後）越前福井に良雄（りょうゆう）という、真宗大谷派の僧侶が存在していたことを告げられた。

そして、先に挙げた四〇〇点の徳川関連史料の一部であったことも分かってきた。それにしても、今度の史料の二転・三転。良雄の印がすぐに元禄事件の大石内蔵助に気持ちが走ったのも無理からぬことであった。

忠臣蔵関係者としては、安永年間に良雄（りょうゆう）という僧侶が実在した事を知っておくべきである。



文楽鑑賞と  
大阪忠臣蔵めぐり  
中央義士会 萩原 栄

平成二十四年十一月十七日から十八日にかけて、「文楽鑑賞と大阪忠臣蔵めぐり」と題して希望者を募り、文楽と史跡めぐりの旅に出ました。

旅行者は、(財)中央義士会の三輪三郎氏、柿崎輝彦氏、上原益雄氏、金子堅一氏、上森茂氏、奥中敏之氏夫妻と遠藤光恵氏、十八日に参加の岡本佐代子氏、そして萩原の合計十名。上森氏は広島から、奥中氏と岡本氏は地元大阪からの参加です。

文楽鑑賞は、大阪国立文楽劇場において、八年ぶりに「仮名手本忠臣蔵」が通して行われるため、十七日に観劇しました。次の十八日は、大阪にある吉祥寺、浄祐寺などのお寺と、赤穂浅野家の大阪蔵屋敷跡などを巡りました。また、文楽鑑賞に参加しなかった柿崎氏は、別途薬王寺などのお寺へ調査に向かいました。

「仮名手本忠臣蔵」は、三大歌舞伎の一つとして有名ですが、江戸時代から今日まで、最も多く上演されている舞台です。実はこの舞台は、最初は人形浄瑠璃として寛延元年(一七四八)に初演されたもので、大当たりしたため、後に歌舞伎で演じられるようになったものです。

公演は、大序から大詰までの通しのため、朝十時半開演で夜の九時終演という、まさにマラソン観劇

でした。江戸時代は、途中で弁当を食べたり、飲んだりとゆったりしたもののようでしたが、今は、上演中は飲食禁止で、途中途中で休憩が入ります。



国立文楽劇場にて一観劇の方々

三段目の殿中刃傷の段では、高師直はいかにも憎々しげで、塩谷判官をいじめます。このいじめだけは、史実に近いのではないのでしょうか。

五段目の山崎街道出合いの段、六段目の早野勘平腹切りの段、七段目の祇園一力茶屋の段など、息もつかせぬ見せ場が続く、全く時間を感じさせません。人形は、次第に人間のように動き始め、野太い太夫の語りは、いつの間にか顔世御前やおかるの声に聞こえてくるから不思議なものです。これこそ、世界無形文化遺産に選ばれた、伝統芸能の技でした。

十七日に一人で別行動の柿崎理事は、中央区本町

橋へ行き、そこにある天野屋利兵衛の碑などの調査に行ってきました。この碑は昭和十四年八月に建てられましたが、裏の碑文は、戦争による被害のためか、真ん中半分が剥がれ落ちていて、文章の判読が難しくなっています。表面には、「義侠 天野屋利兵衛之碑」と刻まれています。



天野屋利兵衛の碑

次の日は、地下鉄千日前線に乗り、谷町九丁目駅で、地元大阪の二人と待ち合わせをしました。

最初に、谷町にあるお寺群の中から、堀部弥兵衛と安兵衛の供養墓のある福泉寺。二人の供養墓は文化四年十一月に建立されたものです。

また、天川屋利兵衛の墓と大高源五の供養墓のある、薬王寺へ行きました。大高源五の供養墓は、風化のため表面の多くが剥離されており、判読は難し

次に、原惣右衛門の供養墓と惣右衛門母の墓のある長久寺へ向かいました。長久寺にある惣右衛門



原惣右衛門母と惣右衛門の新しい墓



右側が原惣右衛門母の墓  
左側が原惣右衛門の供養墓

いのですが、下に大正十年に造られた礎石があり、そこには大高源五の名と共に、「梅で呑む茶屋もあるべし死での山」の辞世の句が刻まれています。

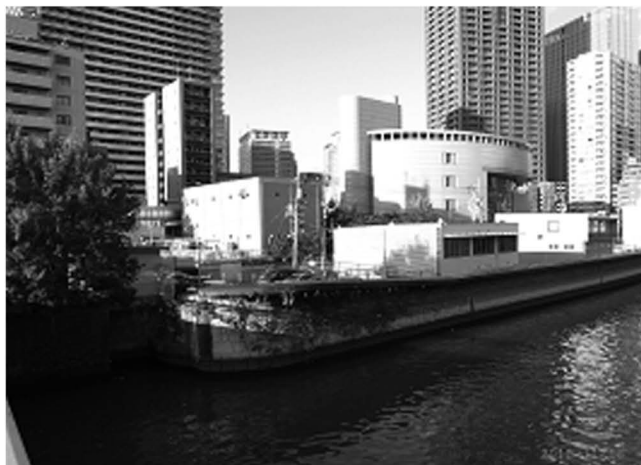


真ん中が浅野内匠頭、右側が大石内蔵助、  
左側が大石主税の供養墓

次に、吉祥寺。周囲の塀に雁木模様が描かれていますので、よく目立ちます。ここは大阪義士会の本部であり、かつて、赤穂浅野家の菩提寺でもあったお寺です。山門をくぐると正面左に大石内蔵助の座像が控え、右手に浅野内匠頭、大石内蔵助、大石

の母の墓は、元禄十五年八月十一日に母が亡くなった時に惣右衛門が建てたものです。七月二十八日の円山会議で、討入りのゴースインが出た直後の大変な時期に母親が亡くなられています。惣右衛門の心中はいかばかりであったでしょうか。母の隣には惣右衛門の墓もありますが、これは、子息の惣八郎が建立したものです。なお、墓域に母と惣右衛門など原家の新しい墓が建っていますが、これは平成元年十二月に、元の墓石の表面が剥がれ、文字の判読ができなくなってきたために、新たに建てられたものです。

午後もう少し遅くなって、中之島の赤穂浅野家の蔵屋敷跡と広島本家の蔵屋敷跡へ行きました。赤穂浅



常安橋からの風景。真ん中手前左側のビル付近が、赤穂浅野家の蔵屋敷跡。右側の半円形の建物が市立科学館

主税の供養墓があります。また、新しいものですが、赤穂義士の石仏群もあります。  
次は、竹田出雲の墓のある青蓮寺。竹田出雲の墓は初代と、「仮名手本忠臣蔵」の作者の一人である二代目が並んでいます。前日に文楽「仮名手本忠臣蔵」を見た関係から、作者のお墓にも詣でできました。  
ここから四天王寺を通って、門前町で昼食。市電阪堺電軌上町線に乗り、住吉公園駅で下車、途中で住吉神社へお参り後、大石内蔵助、主税と寺坂吉右衛門の供養墓のある一運寺で線香を手向けました。

野家の蔵屋敷跡は、常安橋から見ると、市立科学館の西側で、今は、中之島抽水所辺りがそうです。元禄赤穂事件の頃は、岡本次郎左衛門が留守居役をしていました。広島浅野家の屋敷跡は、市立科学館と国立国際美術館の北側一帯で、今は、広い空き地になっています。



赤穂浅野家蔵屋敷跡

日も陰り始めたところに、矢頭長助と右衛門七の墓のある堂島三丁目の浄祐寺へ行きました。ここで今年八十八才になる住職と親しくお話をすることができました。矢頭長助と右衛門七は、赤穂城引渡の後、この近辺に住んでいました。長助が元禄十五年八月十五日に亡くなると、近くの無縁仏などと一緒の場所に葬られましたが、後に近隣の人々が、掘り起して宝暦二年（一七五二）にここに墓を建立したも

のです。右衛門七の墓は、戦争中にここに移設されました。墓はここにある長助と右衛門七に限らず、いずれも表面の剥離が激しく、全文を読むのが難しくなっています。これは、当時の墓は、和泉石といい、彫りやすい砂岩でできているため、風化によって表面が剥離されるためです。



右側が矢頭長助、左側が矢頭右衛門七の墓

ここまで一日歩き通しで、昨日の十時間に及ぶ文楽鑑賞と相まって全員疲労困憊の極に達していましたが、最後の力を振り絞り、橋本平左衛門と淡路屋のお初と心中した蜷川（曾根崎川）に向かいました。蜷川は、現在はありませんが、今の曾根崎新地の新地本通りに沿ってありました。心中した場所の特定はできませんが、新地の茶屋で二人は元禄十四年十一月六日に心中したことが、佐々小左衛門から

早水藤左衛門宛の手紙で分かります。また、早水藤左衛門が一切を処理しましたが、これも、沢木彦右衛門から藤左衛門へのお札の手紙で分かります。この事件は当時、蜷川心中として有名でした。



浄祐寺にて、真ん中がご住職

なお、曾根崎にある露天神社（お初天神）には、近松門左衛門が人形浄瑠璃として作り、有名になった「曾根崎心中」の碑があります。

十七日と十八日にかけて、文楽を鑑賞し、大阪の町を歩き回りましたが、体育会系の体力を要する旅でした。

最後に、快く拝観とお焼香を許可していただいたお寺に感謝いたします。特に、ご説明いただいた長久寺と浄祐寺にはお礼申し上げます。





この懐紙は三百年経った現在も四国のある団体で保存されております。

天地の外はあらじな千種だに  
本さく野辺に枯ると思えば

世や命咲野にかかる世や命

茅野和助常成(行年三十七歳)

本意を遂げ侍る頃、仙岳禅寺に至りて、

思いきやわが武士の道ならで

かかる御法の縁に逢とは

木村岡右衛門貞行(行年四十六歳)

『木村岡右衛門の次の座に茅野和介居らるるに、あなたにも何ぞと申たれば、懐紙なくして左右を顧らるる故に、我懐紙を出す。……茅野和介常成、是(右記和歌)を賜はる』

上野介殿の首しを故主の墓前に手向るとて、

其匂ひ雪のあちらの野梅哉

岡野金右衛門包秀(号放水)(行年二十四歳)

『東向に岡野金右衛門大高源吾居らる、是へも所望せしに、殊外辞退なりしを、是非にと申書くれらる』

山を劈ちからも折れて松の雪

大高源五忠雄(号子葉)(行年三十二歳)

『大高源吾忠雄、号子葉、三十一、是をうく』

前回(全国義士会連合会々報第二十六号、平成二十一年十二月)に続いて今回は「白明話録」に見られる義士達の辞世を中心に、話録の内容も一部紹介してみました。

なお、文中『』書きの部分は同話録の引用であります。

白明話録は、元禄十五年春、土佐から江戸芝泉岳寺へ修業僧として来ていた月海白明が、同年十二月十五日朝、本所相生町の吉良邸へ討ち入り、見事主君の仇、吉良の御首を頂いて泉岳寺へ引き揚げてきた赤穂義士達を接待したときの様子を克明に記録したものであります。

泉岳寺での約半日に及ぶ義士達の行動が生々しく描かれている貴重な史料であります。

たとえば白明が義士達の人数《四十四人》を点呼した際、寺坂吉右衛門が一人欠落していることを確認したことについても詳しく記されております。

泉岳寺での義士達は大石父子のほか老人衆と若い衆が、寺と衆寮の二箇所に分かれて休んでおり、白明は衆寮で若い衆達の給仕をしておりました。

『木村岡右衛門の、そなたはいくつと問はる、我等答て十九歳と申、いづくの出ぞ、曰土州なりといふ、四十余人の面々右の肩に、姓名を書きたる金紙をつけ、木村には別に左の肩に、法名英岳宗俊信士の六字あり、我等問て曰、其法名は誰より傳受に候や、曰、播州の蟠溪禅師より受持す、我れ心に思へらく、……木村は同州の人、必禅門に入りたる人やらん、偈なきにあらずと思ひ、何ぞ書てもらい度と存じ、昨夜の辞世今朝の即興を所望したるに、しばらくありて懐紙を取出し、即興の和歌(右記)を書いてくれる。

(最後にその懐紙に) 木村貞行、行年四十五、英岳宗俊信士と書しに、右の手の指の傷の血ふとおちたるを、書きかへらるべき様なり、我等申に、其血痕一人の儀に候間、何とぞそれを賜り候へと申す、すなわちこれをうく』

以上義士四氏の辞世が白明話録には見られるのですが、このほか同話録には『武林唯七詩、神埼與五郎和歌、外の僧所望いたしたるに書やられたるゆえ、我等も所望せしに、最早飯出来て其義に及ばず』とあります。

そのとき武林唯七がほかの僧に書いた漢詩についてはずでに本題の連載(その二)(中央義士会会報第五十八号、平成十九年十二月)に掲載しましたが、改めてここに再掲しました。

三十年来一夢中 捨身取義夢独同  
双親臥疾故郷在 取義捨恩夢共空

武林唯七隆重(行年三十二歳)

さらに話録は『いづれもつかれたと見え、殊外眠らる、皆温和柔和なる人体なり・』と綴っております。

さもありません、昨夜、いや今朝三時半(寅の一天)吉良邸へ押し入り、約二時間に及ぶ格闘の末、見事本懐を遂げ、重装備、雪でぬかるむ三里の道をしかも上杉の追っ手も気にしながら泉岳寺まで引き揚げてきた義士達でありました。

そんな疲れの中でこんなにもすばらしい辞世を遺してくれました。

しかも彼らは『皆々後世回向をたのまる』と白明に来世のことまでお願いすることを忘れてはおられませんでした。

## 「大石頼母助の系譜」 とくに浅野梅堂

発刊

著者：中島康夫

今、初めて解き明かされる浅野家の秘密。浅野家の始祖、笠間から続いた赤穂義士。大石内蔵助良雄の大叔父大石頼母助の系統とは。さらに、幕末に浦賀奉行、江戸町奉行などを歴任した、稀代の文人浅野梅堂とは。

平成24年11月16日発刊

500部限定

定価：1,000円(税込) 送料80円 合計1,080円

購入ご希望の方は郵便局の払込取扱票で

特定非営利活動法人 忠臣蔵を守る会 口座番号 00190-0-346038

にお振り込み下さい。通信欄に「大石頼母助の系譜」とご記入下さい。

振込を確認次第、発送いたします。

## 全国義士会連合会

北海道義士会	会長	北谷文夫	TEL 0125-53-3513	北泉岳寺内
笠間義士会	会長	塙 東男	TEL 0296-72-0090	笠間稲荷内
京都山科義士会	会長	杉浦治郎右衛門	TEL 075-581-5645	大石神社内
大阪義士会	会長	北川喜久造	TEL 06-6771-4451	吉祥寺内
京都義士会	会長	橋本一妙	TEL 075-771-2244	本妙寺内
赤穂義士会	会長	豆田正明	TEL 0791-43-6848	赤穂市役所内
赤穂義士顕彰会	会長	飯尾義明	TEL 0791-42-2054	大石神社内
豊岡義士会	会長	友田 誠	TEL 0796-22-5097	
忠臣蔵を守る会	代表	中島康夫	TEL 03-3630-1927	
中央義士会	理事長	中島康夫	TEL 048-993-2591	

## 今期中に出版された「忠臣蔵」関係新刊本

書名	編著者	発行所	価格
大石頼母助の系譜 とくに浅野梅堂	中島康夫著	中央義士会	1,000円
大石内蔵助の美	赤穂市立美術工芸館田淵記念館編	赤穂市立美術工芸館田淵記念館	600円
四十八人目の忠臣	諸田玲子著	毎日新聞社	1,890円
ビッグマンスペシャル 日本史100人ファイル 日本史“悪役”100人	世界文化社編	世界文化社	1,260円
大江戸今昔マップ	かみゆ歴史編集部編	新人物往来社	1,995円
江戸東京の寺社609を歩く 一山の手・西郊編一	山折哲雄監修・楨野 修著	PHP研究所(PHP新書)	各966円
原節子のすべて	新潮45特別編集	新潮社(新潮ムック)	1,470円
日本剣客伝 江戸篇	山岡荘八ほか著	朝日新聞出版(朝日文庫)	714円
花や散るらん	葉室 麟著	文藝春秋(文春文庫)	620円
花見ぬひまの	諸田玲子著	中央公論新社	1,680円
江戸東京の寺社609を歩く 一下町・東郊編一	山折哲雄監修・楨野 修著	PHP研究所(PHP新書)	各966円
彩色事典 将軍と江戸の武士	エディキューブ編	双葉社	1,470円
池波正太郎を歩く	須藤靖貴著	講談社(講談社文庫)	680円
ぶらり日本史散策	半藤一利著	文藝春秋(文春文庫)	580円
大江戸 歴史現場の歩き方	歴史現場研究会編	ダイヤモンド社	1,575円
浄瑠璃を読もう	橋本 治著	新潮社	2,100円
江戸の神社・お寺を歩く 城西編	黒田 涼著	祥伝社(祥伝社新書)	各1,155円
江戸の神社・お寺を歩く 城東編	黒田 涼著	祥伝社(祥伝社新書)	各1,155円
今むかし 日本の名城88 西日本編	訓原重保ほか執筆	平凡社(別冊太陽)	1,680円
武士道と業隠	磯野正勝ほか執筆	徳間書店(TOWN MOOK)	750円
図解 日本史100人	成美堂出版編集部編	成美堂出版(SEIBIDO MOOK)	1,365円
日本史のあの人物 ハテ、そういえば…?	歴史の謎を探る会編	河出書房新社(KAWADE夢文庫)	570円
汚辱の世界史	J.L.ポルヘス著 / 中村健二訳	岩波書店(岩波文庫)	567円
これが本当の「忠臣蔵」 一赤穂浪士討入り事件の真相	山本博文著	小学館(小学館101新書)	777円
4月花形歌舞伎 通し狂言仮名手本忠臣蔵	新橋演舞場宣伝部編	松竹	1,200円
富子すきすき	宇江佐真理著	講談社(講談社文庫)	610円
平日	石田 千著	文藝春秋(文春文庫)	610円
日本近世の歴史3 綱吉と吉宗	深井雅海著	吉川弘文館	2,940円
私が愛した大河ドラマ	洋泉社編集部編	洋泉社(歴史新書)	819円
100分de名著 新渡戸稲造 武士道	山本博文著	NHK出版	550円
忠臣蔵の真実	栗原 亮著	常陽新聞社出版局	2,100円
大阪春秋 第145号	大阪春秋編集部編	新風書房	1,050円
舌耕・書本・出版と近世小説	山本 卓著	清文堂	8,820円
戦争中の少年の赤穂義士祭	砂本秀義著	ノアブックス	2,100円
忠臣蔵異聞 一家老大野九郎兵衛の長い仇討ち一	石黒 耀著	講談社(講談社文庫)	680円
兵庫県謎解き散歩	大国正美編著	新人物往来社(新人物文庫)	770円
週刊 江戸 No.98	デアゴスティーニ編	デアゴスティーニ	552円
爆笑問題の忠臣蔵	爆笑問題著	幻冬舎	1,365円
別冊歴史REAL 歩く・観る・学ぶ 江戸の大名屋敷	原 史彦編著	洋泉社(洋泉社MOOK)	1,890円
謎手本忠臣蔵 (上)(中)(下)	加藤 廣著	新潮社(新潮文庫)	上・下578円、中515円
忠臣蔵顛末記 落日の士分	岡本和明著	文芸社	1,575円
赤穂の指定文化財	赤穂市立歴史博物館編	赤穂市立歴史博物館	900円
忠臣蔵 四十七士の報復	安土 弁著	ジョルダンブックス	1,680円

・市販されていない著書もございます。

・ほんの一部だけ元禄事件を扱っている出版物で除外している著書もございます。

・この一年間で、この他に出版された忠臣蔵物、あるいは元禄事件関係の書物をご存じの方は、ご教授下さい。

・本頁に関して、赤穂市教育委員会 生涯学習課 小野真一氏の協力を得ました。

平成二十五年創立百年祭  
堀部安兵衛武庸を顕彰する「武庸会」

越後新発田 嶋谷次郎八

新発田市御幸町一のの一

播州赤穂

忠臣蔵問屋わたや

店主 矢野英樹

赤穂城隅櫓北隣 0791(42)1151

平成二十五年二月四日  
日輪寺 義士十七名遺髪塔前 討入りそばふるまい

(財) 中央義士会山鹿支部

(財) 中央義士会

評議員 丸山裕之

旧赤穂藩飛地

兵庫県加東市出身  
川崎市川崎区在住

(財) 中央義士会

第一回、二回、三回忠臣蔵博士試験合格

忠臣蔵博士 鎌田豊治

川口市末広三三三十九

(財) 中央義士会

DVD担当 椎野恭治

秦野市曲松二一四一七

(財) 中央義士会

キنگレコード専属 会員 梁田欣吾

芸名 大 金 吾

★最新曲「妻恋夜空」 作曲・船村 徹

十月二十六日より全国レコード店にて発売中/カラオケ配信

TEL: FAX: 〇三三三四六五一四七〇七

弔文

平成二十四年八月十八日、豊岡義士会会長  
友田英弥様のご逝去されました。  
生前は全義連の発展に多いに寄与されました。  
改めて御冥福をお祈り申し上げます。

全国義士会連合会事務局

編集後記

- この義士研究の世界にも、あつちこつち顔を出しては、餌話を手土産に情報を集めて、目録を作ろうとしている方が居りますので、充分気をつけて下さい。
- あつちこつち顔が出たら、マル秘史料まで一覽表になり、ホームページ上で発表される可能性が有ります。長期戦ですので気を付けて。
- パソコン上で、「義士の手紙」などが売りに出ていることがありますが、あわてず、買う前に全義連本部に、是非、ご相談下さい。
- 少し前に、大石内蔵助の呼子笛が二〇〇万円で買われた後に、鑑定依頼がございましたが、買う前にご相談下さい。
- こう云う時代ですから、各地義士会では御手持ちの史料には、十分気を払って下さい。団体・個人に関わらず、何かございましたら、直ぐ本部中島までご連絡下さい。
- この度、関西のお寺より「妙海尼葛籠之記」「同来迎備之記」という写本が発見されました。江戸の妙海尼が何で関西のお寺に葛籠を納めたのか、興味あるところです。来年になりましたら、目を通してみようと思っております。
- 「大石頼母助の系譜」是非お買い求め下さい。御入金下されば直ぐお届けできます。浅野家を支えた頼母助は、その後、どうなったか勉強して下さい。

編集者 中島康夫(企画・編集・検証)

萩原 栄(編集)・三輪三郎(校正)

富岡 克(校正)・成清寛徹(校正)

(株)正大印刷社(印刷)